

# 所 報

## No. 16

佐賀県立教育研究所

### も く じ

- ・ J・S・ブルーナー教授の講演を聞く ..... (1)
- ・ 最も困難視されている中学校作文指導 ..... (3)
- ・ 夏の研究集会等で何が問題になったか ..... (4)
  - ・ 教育のシステム化
  - ・ 学習意欲を高める条件
  - ・ 実用C A Iへ変身を
  - ・ 学習の理論
- ・ レポート ..... (6)
  - ・ 各種検査の実施状況
  - ・ 第五回教育評価研修会
- ・ 海外研修記 ..... (7)
  - ・ ハワイ大学 サマーセッション
  - ・ アメリカ 英語研修講座
- ・ ひろば ..... (8)

## J・S・ブルーナー教授の講演を聞く

・とき 47.8.22 ・ところ 大阪市南御堂会館

### 演 題 「教育過程の現代化」

— 幼い子どもたちの未来のために —

所 員 江 副 三 郎



子どもの潜在的な知的能力をほりおこすはじめに、講演の要旨を紹介する前に、ブルーナー教授の知性主義教育にふれておきたい。

1960年に教授が書いた“教育の過程”でのハイライトは“どの教科でも、知的性格をそのままに保って、どの年令の、どの子どもにも、効果的に教えることができる”という有名な仮説であろう。この仮説は、60年代の諸科学の急激な発達により、高度化された教育内容に子どもを立ち向かわせ、そこで学習の結果得られた知的興味や興奮をよびおこしてやれば、子どもが潜在的にもっている知的能力を開発することができるということを意味している。そして、知的能力の開発は、どの教科でも、どの年令の、どの子どもにも可能であると解されている。とすれば、たとえば、数学ぎらいの子どもにも、しかも数学を就学前の幼児にも、さらに知能おくれの子どもにさえも学ばせることが可能であるといえるはずである。

高度化された教育内容は、学習者である子どもにとって困難だという常識のまさに逆である。ここにブルーナーの知性主義に対する批判が生まれるのであろう。しかし、ブルーナーは、知識のつめこみや、知育偏重の教育の非を強調している。そればかりか、70年代では、知的性格を“そのまま保って”が“強力的に”また“おもしろく”と深められてさえる。(ブルーナー著「教育における妥当性」の中で、佐藤先生による。)このことは、今日、この仮説がさらに高く評価されていることにはかならない。さてこのような大胆な理論は、一体どのような根拠から生まれてくるのであろうか。

教授の知性主義教育は、知育偏重の教育ではない。子どもがすでに持っている潜在的な知的能力をほりおこす教育である。これは、子どもの認知構造の発達段階(おとなと異なった)と、環境が

思考の発達におよぼす影響とに視点がおかれているように思える。そのよってくるところは、ピアジェの“知能の発達段階説”にもあろうが、教授自身、戦後のアメリカの反知性主義的傾向に対し、知性の教育を強調することによって、バランスを回復しようとしたところにある。そして、何よりも子どもの(就学前の幼児も)知的成長の芽を信じていることであろう。したがって、講演では、この二つの視点に関する実験や、研究の例がいくつも引用されたのである。

### “教育の過程”以後の大きな変化

講演は“教育の過程”以後10年間に、アメリカの社会は、二つの大きな変化があった、ということから始められていた。

その一つは、恵まれない子どもは、同じ教育の機会をもっていないということ。

南部から北部へ移動してくる子どもは、入学後能力が伸びない。その原因は、ある欠陥、つまり精神虚脱の状態にあるからである。彼らは、教育や学校は、自分たちには何も与えてくれるものではないと信じている。だから彼らには文化的環境を与える必要があるという。

もう一つの現象は、母親の態度の中に、階級の差があらわれているということ。

中産階級の母親は、子どもの自発的な行動に対して介入しないやり方をとるが、貧しい階級の、たいていの母親は、子どもの能力を信頼しないし、子どもたちは、あきらめの状態であるという。

以上の見解をうらづける事実として、このような子どもに、人間の成功の鍵は何かと問うと能力ではなく、運だという答えを返してくる。このような事実は、学校のカリキュラム改造だけの問題ではなく、社会の問題だという。知能が劣っている子どもや、環境的に恵まれていない子どもの能力をほりおこすことが、社会的にも、政治的にも問題として浮かびあがってきたというのである。

入学後、大きな学力差を生じるのは、就学前における教育的環境条件に大きな格差があり、そのような条件の中で見捨てられた子どもは、年少時から無力感を抱いているからである。このような子どもが、知的に最大限に活動し得るための前提条件は、家庭でも、学校でも、子どもに知識を与えるだけでなく、無力感から脱し、不動の信念を与えねばならないという。

教授グループが10年間に実験した、環境からの刺激の与え方のちがいが、環境の安全性や不安定性による子どもへの影響についての結果が報告された。それによると、たとえば、保育所の保育室を、グレーとブルーの、変った形状のもののない部屋では、子どもの注意力が乏しく、反対に、何か注意を引きつけるものを与えた場合は、4週間も早く能力を発揮する子どもができたという例。

また、母親がいない子どもたちは、環境に対して反応する能力の発達が阻害されてくるという例。特に注目すべきことは、恵まれない子どもたちに欠けているものは、特定の技能でなく、環境に反応していき、確かめよう、自然な好奇心をおこしてみようとする意志力の欠如であるという。

子どもが自らの意志で環境に働きかける“自発性”の欠如は、子どもと環境の間に行なわれるフィードバックの必要を招来するのである。教授が“子どもはオモチャで遊ぶ”のではなく“オモチャに遊びかける”ことが重要だと指摘するのは、意志力が先の仮説の前提であり、学校における教育方法について、どの子どもにも、特に知能おくれの子どもの教育にとって示唆するものではあるまいか。

### 早期教育論

ブルーナーの知性主義論は、年少の時から、教育によって、人間のもっている知的可能性を最大限に伸ばしてやるのが、子どもを真に人間にするという人間尊重を大前提としていることを、講演で改めて知ることができた。

教授は、知識のつめこみを否定する。就学前の幼児がすでにもっている知的成長の芽を、ひとしく伸ばしてやることは、知識のつめこみ教育によってではない。早期教育は、子どもたちに知識を与えるだけでなく、不動の信念を与えねばならないという。したがって、単に文字を早く教えるとか、音楽や外国語という特定の技能を0才から始めるべきだという、いわゆる才能教育ではない。幼児の発達段階に適した内容を、どの子どもも学び得るやさしい形で、しかも概念を保った形で行なわねばならないのである。そして、最初の段階では、何かをやるための知的刺激を与え、(ただ道具を与えて遊ばせるだけではない。)そこから、自分でやれるようにすることがたいせつである。初めから決して大きなことを期待してはいけない。小さい毎日日々の積み重ねが結果的に大きな成果を可能にするという。このようにして、これまで教師が知らなかった可能性が引き出されてくると指摘している。

そもそも教授の早期教育論は、恵まれない黒人の子どもたちの、知能の低下をくい止めるものであったという。また教授は、今までの教育学は、恵まれた子どものためにあった。今からの教育学は恵まれない子どもたちのためになければならないともいった。子どもの現実と未来を志向した教授の、きびしさと愛情を早期教育論を通して知ることができるのである。

### 情緒と知性のバランスを

教授の調査で、つぎのような事実が報告された。心臓が弱く、赤血球が破壊され、酸素不足の少年

が手術をうけた。父や母が病気の子どもを、何とかけん命に励まし、自分で一歩でも二歩でも歩けるように励ましを行なった。その結果、健康状態の回復後は、知能の発達が普通の子どもと全く変わらなかった。しかし一方、がっかりして勇気づけをやらなかった方の少年は、手術後のその発達がおくれたということであった。

この例は、努力して子どもの可能性を現実のものとするか、努力しないで可能性をねむらせるかの問題であろうか。親の努力が子どもの勇気をよびおこし、学習の支えとなることの証明であろう。

教授は、思考と感情という、人間のもっている二つの大きな能力のバランスを何度か強調している。さらに、人間がそのすぐれた知的能力をじゅう分に発揮するためには、その根底に“自由な感情の表現”が必要だと説くのである。そして、子どもの自発的、創造的な自由な感情の表現活動を尊重しながらも、その中に道具（幼児では玩具）や親との対話を組み入れて、子どもの潜在能力を伸ばす知的早教育論が展開されるのである。また情緒教育と知的教育のバランスの重要性について、

本年6月、県内の全中学校の国語主任の御協力を得て、標記の調査を行なった。回答率100%という結果に、現場の熱意のあつさを覚え、御協力に対し深甚の謝意を表したい。

本調査は、今日重要視されている作文教育が、県下中学でどのように考えられ、実施されているかという実態について、基礎的な資料を得、今後の指導の改善点をみいだすことをねらったものである。

調査の内容は、5分野31項目にわたるものであるが、いまここにそのすべての結果を紹介する紙面をもたないで、「作文教育についての教師の意見」についてその一部をとりあげ、詳細は、年度末に出す予定の“研究紀要”にゆだねることとする。

重要度の意識第2位、困難度意識第1位

図Iに示す通り、指導上最も重要だと考えられている領域は「読解」、次いで「作文」「聞く・話す」…。作文は七領域中第2位、しかし読解との差ははなはだ大きい。一方、指導上困難を覚えるその最たるものが「作文」で、県下中学の44%すなわち約半数が第1位と指摘し、さらに第2位集中度まで合わせると、実に62%の高率を示す。指導要領の時間の比重の倍増によることももちろんであろうが、「文章などを書く」ということの教育的意義の大きさは認めているながらも、実際指導にあたっては、その障害はあまりにも多

所員庄島奎介

最も困難視されている中学校作文指導

すぐれた知的活動の背景には、情緒が必要である。たとえば、自信という情緒のあり方が知的能力に大きな影響を与えるといい、情緒と知性の区別や情緒か知性かの議論はそれほど重要ではないともいうのである。(8月25日、NHK、教養特集、幼児の心、ブルーナー、グリーンフォードと佐藤三氏の対談より)

人間というものを、できるだけ人間らしく

これが講演のむすびのことばであった。

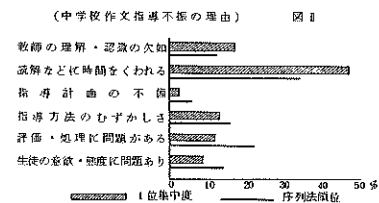
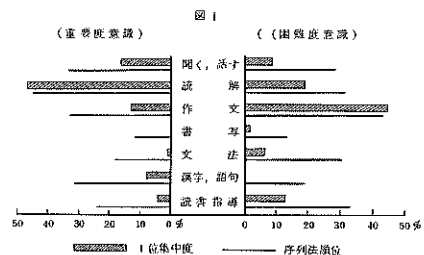
教育の目的達成は、問題を自ら解決することのできる能力があるという希望をうえつけることによって可能である。だから教師は、どの子どもからも、学習の主導権を奪うことなく、どの子どもにも、容易に学び得る手段を創造するソフトウェアの開発こそ教師の課題であろう。“教育過程の現代化”ということばを一度も聞くことなく講演は終ったが、“幼い子どもたちの未来のために”教育過程の現代化とは何かを、もう一度問い返す必要に迫られる思いがするのである。



く、かつ大きいという実情なのである。

障壁の最たるもの——時間不足・処理の困難

図IIに明らかなように、「読解などに時間をくわれて」作文の時間が不足するという悩み——まずは「教師の理解・認識の欠如」であると自省し、「指導計画の作成に問題」があるというべきであろうか。さらに、県内440名の国語教師の大半が学級を担任し、平均週22時間もの授業をもち、なお雑務に追われ続けているという現状は、作文の「処理・評価」に大きくその影をおとしているといえよう。



## 「教育のシステム化」をめぐる問題

所 員 田 中 照

教育のシステム化に関する共同研究富山集会における国研の中村重康氏の講演内容を要約して紹介すると、大野連太郎氏は、システム化を学習指導の近代化にせまる柱としてとらえ、学習指導を一般化、システム化、機械化の三つの観点から扱い、学習指導過程を構造としてとらえ、これをフローチャートで表わしていくことを提唱している。つまりシステム化は近代化のための手段・方法であり学習効果を高めることに目標をおき、指導の流れを明確にする一手段としてとらえている。

また矢口新氏は「教育におけるシステム開発」という発言の中で、システムという考え方自体、過去の職人の生産方式の中からは生まれてこなかったものである。近代の技術革新・産業革命以来大量生産方式がとられ、機械化・分業化がすすみここに初めてシステムの考えが生じてきたといっている。

システムの概念は教育自体の中から生まれてきたものではない。従って教育のシステム化を考えるにあたって、システム工学は過去にどのような業績をあげ、どのような示唆を与えてきたかを知

ることがたいせつである。

システム概念の発生は、第二次大戦中英国において戦略研究に原子物理学をリーダーとして数学者・天文学者・生物学者・士官・測量技士など各方面の全く異なる一流学者でチームを作り、グループ討議を通じて状況を構成する要素の分析をし、その結果一つの数学のモデルを作り、統計的解析によって最適の解答を求める手法により大いに偉力を発揮したのである。戦後この手法（OR）が米国に渡り、①電子計算機のソフトウェアの開発②アポロ計画、③政府機関の組織づくり、等にその手法が活用され、さらに企業経営の中に取り入れられて、その業績が高く評価されている。

学習指導のシステム作りは、何をしようとするのか、どう改善するのか目的を明確にして、学校、地域、県といったところで人的配置を考え、教材の開発計画を練り、そしていくつかの代案を用意し、客観的データをもとに最適な方法を個々の先生におろして実施してもらうようにすべきである。

現在の教育のシステム化の段階は、学校の授業の中にいまま少し近代的手法を導入したいという願望から各種の教育機器を入れてこれと子ども達の学習過程との関係を調べていこうという、ひとつの機械化の段階である。

## ある提案〈実用CAIへ変身しよう〉

所 員 香 月 和 男

今日まで、CAI（Computer Assisted Instruction — 電子計算機による個別学習）は、現在の授業の中で一番欠けている個別指導を最も理想に近い形で実現でき、さらに教授学習過程についての詳細なデータをも収集できるものとして、教育心理学者をはじめ多くの教育関係者に期待されてきた。また、その実現への隘路である

- ① コンピュータの価格
- ② 端末の価格
- ③ 学習プログラム製作費用

を引下げる努力も関係者によって、精力的に、続けられてきたが、現在なお、実用化の域には、ほど遠いようである。

上記の①、②については、実用化の時期も近いときが、③の学習プログラム作成の点では、絶望的なほど膨大な人知と費用を動員しなければ、期待する個別指導の学習プログラムは作成できないという見通しである。つまり、コンピュータは人間が正しく命令しさえすれば、気の速くなるような多くの資料の中から、多数の子どもひとりひとりに最適の教材を瞬時に探し出し、別々の子どもに同時に提示できるというすばらしい働きをす

るが、その複雑な仕事の一切のスケジュールを、あらかじめ人間が作って与えねばならないところに、大きな障害があったというわけである。費用とCAIの関係は、教育に対する経済援助が次々に打ち切られたため、かつては30システムもあったCAI（筆者が勉強したのはペンシルバニア大のもの）が、現在、二つのシステムに縮小してしまっているアメリカの事情からも知ることができよう。（日本のCAIは、現在、能力開発工学センター、日立中央研究所、機械振興協会、日本IBM、電々公社の六つである）。以上の状況を背景として、最近、〈実用できるCAIへ変身を〉という提案がなされている。すなわち、実現のむずかしい理想的な個別指導への夢をすてて、

1. 学習プログラムは、直線形に限定しよう
2. 解答も文字で答えることをやめ、クラウドのTMのように、多選択キーと学習キーだけに単純化しよう。

そうすると、プログラム作成も容易になり、端末も簡単で、電算機もミニコンですむことになる。それを限定された目的、たとえばドリルなどに使えば、十分、有効だといえるのである。さて、皆さん、この提案いかがなものでしょうか。

夏の研究集会等で何

## 《教育心理夏期講座》から

### 学習意欲を高める条件

所員 岩永憲一良

学力の向上をめざすには、その基盤として学習意欲を高めることが大切である。京都教育大の林保先生の話によると、自発的学習を動機づけるに必要な基本的態度として、①能動的態度、②科学的思考態度、③知識を体制化する態度、④学習耐性の四つがあげられ、これらは学校家庭を通じて習慣化される必要がある。これらの態度のもとに学習意欲を高める条件として、次のことが考えられている。

#### 1 知的興味・知的好奇心の利用

##### ・「疑惑」刺激の呈示

たとえば子どもは物の重さを、物をもったときの抵抗感から考えるので、空気には重さがないと考えがちである。したがって同じカラ箱を真空状態で測ったときと、空気の入ったときの重さの相違を実際に観察させると、生徒はひじょうなおどろきを喚起させられ、その学習に強く動機づけられる。

#### 2 学習することの必要性の認知

学習することの意義、価値を自覚させるために教師は生徒に学習の必要性について知らせる必要がある。

## 「学習の理論」

所員 古賀信之

京都教育大の林教授の話によると 今日注目されているプログラム学習、発見学習の学習理論的背景はつぎのようである。

#### 1 プログラム学習

##### ○ スキナーの学習理論

特定の刺激に対応して、自発的に行動が生じてくるもので、生じた後に強化をうける。それによって強い行動の習慣が形成される。これがSR理論ともいわれるもので、パブロフの古典的条件づけに対しオペラント条件づけとされている。多人数の教育では強化がおくれがちで、そこにいわゆるTMが考えられてきた。

##### ○ クラウダーの学習理論

スキナーに対比して考えられる。スキナーは能力差は時間(学習の速度)の差とみたが、クラウダーは学習の能力の違いに応じて次に提示するプログラムの系列が変わってくる。こうしたプログラムを組むことが個人差に応ずるものだ

#### 3 学級のモラールの高揚

教師と生徒、生徒と生徒との人間関係が学習意欲と大きなかかわりあいがある。向上しようとする学級には、適度の競争心と、できる子はできない子をはげましてやるふん囲気が感じられる。

#### 4 教材の適否

教材はまず子どものレディネスに相応したもので、むずかしすぎも、やさしすぎもしない適度な困難さのものである場合に、強く動機づけられる。

#### 5 外的強化の操作

時には賞罰、競争などの誘因を操作して学習意欲を喚起することも必要であるが、これらの外からの誘因は、それ自体目的ではなく、あくまでその学習への意欲を導く手段であるにもかかわらず目的化するおそれがある。だから外からの動機づけを行なう場合もできるだけ早く生徒自からの自発的動機づけへの変遷が生じるように配慮する必要がある。

学習意欲を高めるためには、上記の四つの基本的学習態度を身につけさせ、具体的には、上記の四つの条件をみたくように努力することの必要性を感じたが、とくに子どもたちに学習を本当の意味で好きにさせるためには、子どもたちが内発的に動機づけられるような指導をどのようにしたらいいかということが大切な課題と思われる。

という。そしてスキナーはスモールステップで誤り反応をさけようとするが、クラウダーは誤り反応も大事だとし、誤りのフィードバックの効果を考える。したがってスキナーは反応形式を構成法としたが、クラウダーは再認形式(多岐選択法)が効果的だとしている。

#### 2 発見学習

##### ○ ブルーナーの教授理論

ブルーナーの発見学習の特徴は

- ①学習者が発見的な手続きで学びとっていく学習過程のポイントになっているところを集約している。
- ②その場合原則として基本教材を内容とする教材を発見者がたどったような教材の配列にする。
- ③探索的な思考方法をめざす学習である。

##### ○ 発見学習の基本過程

- ①問題意識をもって具体的な事実を観察する。未知な場面に直面して今までの思考様式に変換を迫り問題意識をもち探究にとりかかる。
- ②仮説の着想。観察の内容をつなぎあわせて解決への道を立てる。
- ③概念化。別れ道思考から論理的に矛盾のない仮説へ洗練されていく。
- ④生きた能力への転化。結果としての知識を単に修得するのではなく、知識獲得のための思考方法を身につける。

が問題になったか

## 県内小中学校における各種検査の実施状況

所 員 前 間 正 行

教師が児童・生徒を理解する場合の最も基本的な方法は、人間の感覚をとおして相手を観察することである。その観察を助けるものが、調査や検査である。しかし、観察は主観的であり勤にたより一場面に限られた評価である欠点を持っている。

そこでどうしても客観的な方法による理解が必要になってくる。この方法が標準化されたテストによる理解である。

県下の各学校で実施された検査の状況は、(調査校 中学校 91校・小学校 159校)

### 1 学力検査

- (1) 中学校 — 41校 (46%)
- (2) 小学校 — 104校 (64%)

### 2 行動、性格、適応性検査

- (1) 中学校
  - ・問題行動早期発見テスト
  - ・職業適応性検査 - 26校
  - ・学習適応性検査 - 17校
- (2) 小学校
  - ・学習適応性検査 - 4校
  - ・性格検査 - 2校

### 3 活用例

- (1) 小学校

- ① 知能と学力との相関をは握し、個別指導にあてる。
- ② 学習面では、つまづきをみつけるための資料にしている。
- ③ 事例研究の資料として活用している。

### (2) 中学校

- ① 知能・学力の相関を個人的にしらべ個人相談・進路指導に活用している。
- ② 個々の生徒の学習不足の傾向、非行傾向や悩みなどを知って事前指導に活用する。

### 4 問題点

- (1) 総合的に診断したいが、処理に時間がかかる。また、経費の面で問題がある。
- (2) 実施後の活用の方法がわからない。
- (3) 実施者の技術による誤差がある。
- (4) 検査の結果と、教師観察とのズレ。

一般には資料の収集のための努力のわりに、活用が十分でないのが今日の実情ではなからうか。せつかく実施された各種検査の結果が別々に処理されたままで、その関連の分析が行なわれていない。活用とは、テストバッテリーで個人の診断をし、指導に利用することである。

## 好評だった教育評価研修会

所 員 百 武 健 次 郎

当研究所では、今年も現場教師の要請にこたえて8月に、佐賀、武雄、唐津、伊万里の4会場で「教育評価研修会」を実施しました。500名以上におよぶ受講希望者がありましたが、会場収容能力の関係でお断わりしなければならなくなった先生方には、はなはだ申しわけないと思っています。日頃、現場実践の中で、わたしたちは児童・生徒にどのようにして学力をつけさせ、また彼らの心身の発達のため、どういった手だてを講じたらよいか悩みの多い日を送っています。

これらの悩みを一つでも解決していただくため研修会を催し、理論と現場実践を結合させながら未来を築くこどもの教育に資したいものだと考えます。今年度の研修会のテーマは(2図参照)

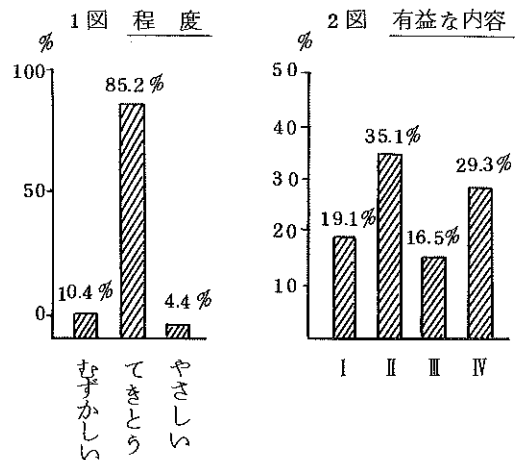
- I 問題の作り方
- II テスト結果の処理と解釈のしかた
- III 各種検査の利用
- IV 学習指導の改善(授業のシステム化)と教育機器の利用

でした。

受講者数は、小学校(318名)、中学校(112名)、高校(23名)。

各会場で、受講者からアンケートをとった結果「程度」「有益な内容」は別図のとおりですが、今後も、このような研修会を続けて欲しいという希望が圧倒的でした。

当研究所も、今後、現場の要望にいささかでも役立ちたいと日夜研究を重ねてゆく所存であります。



## 第5回ハワイ大学 サマーセッションに参加して

佐賀西高 撫尾 清明

ハワイにおける高校についていえば、各学校独自の授業形態をとっている。教育内容については、夏休みが3か月もあり、教師、生徒とも登校しないので接触するチャンスがなかった。ただ生徒は休暇中バイトして大学時の学費に充てられている。大学受験も日本ほどきびしくないが大学に入ってからがむずかしく、容易に単位がとれないようだ。日本とは逆である。大学の教授と学生間もすごく和やかで真剣な討議、質問の間にも笑声がきかれる授業風景だった。宿題も多いようだった。一例だが世界文学の中で日本文学の俳句の講義があった。課題として学生にすぐ俳句数句作らせる。一学生から貰った作品を紹介すると、

On a hard tin  
roof Gold and orange globes  
thundering Mango season

いかにもハワイらしい、カラフルな感じがする。俳句の翻訳書は外人のものばかりだが、日本人自身ももっと意欲的に翻訳し海外に紹介すべきだと思う。

二世の教授も多く、小生のまずい仏典の翻訳をみてくれた山本教授は、自分の車で昼食に誘ってくれ、食事中に色々アドバイスしてもらい大きな収穫を得た。この教授は社会学専攻で日本に関する事柄をよく知っている。講義中でも小生を名指し「腹巻を知っているか」ときくので今着用しているという学生に見せてくれといわれ見せたら喜ばれた。「ヤクザがよくしているか…?」ときくので「ヤクザは白い長い布をまくのだ」と答えると「なるほどそうだ」という。

また「千人針はなぜ心臓にせず腹にするか」と問われ困惑した。日本に関する映画も何回も見せ、日本の制度をよく学生に教授していた。学生の日本語熱もたいへんで日本語講座では絵のスライドを有効に使ってわかりやすく教えているし、学生のおぼえ方も早い。日本の高校における英語教育ももっとhearingやspeakingをとり入れるべきと痛感した。特にhearingはnative speakerの早い英語をそう簡単に理解できるものではない。speakingはどんなに早く話しても相手が理解できぬなら何の役にもたつまい。英会話教師は「日本人の英会話には外人にわかる、リズムカルな英語であること。」すなわち今後のhearing speakingは設備器具の活用も必要だろうか従来の大学入試対策の教授法を変えたとともに大学入試のあり方を猛省すべきである。なぜなら高度の外国語を理解できる日本人のほとんどが英会話ができないという現実であるから。私自身も現地でhearingの力がない事をいやというほど感じた。

## 英語研修講座(アメリカ)に参加して

有明中学校 岡 龍一

このたび機会を得てアメリカにおける英語研修講座に参加した。2か月の研修のうちポストン大学での学生(?)生活が1か月、アイオア州での家庭滞在が2週間で、この間学校視察、日本紹介の授業を行なった。ワシントン市、ニューヨーク、ナイアガラ滝等を見学し、その後は西へ西へとバス旅行が続いた。

西部では人の姿はもちろん、家も木も見えない日もあり、広大な国土を肌で感じる事ができた。

州都デモインの近くの学校で、持参したスライドを幼稚園から高校3年まで見せたが、彼等は実によく質問をする。高校入試がないから自由でのびのびとしており、先生対生徒の上下意識もあまり感じない。我々が見ると羨ましくないと思うところである。古都ポストンでは講義のあいまに史跡を訪れたり、外国人学校を参観した。ハーバード大での日本語教育は1年目にして、すでに丸山真男の「日本の思想」を読んでいるのには、参観者一同感嘆の声をあげた。

西部のグランドキャニオンでは、大自然の威力にただ敬服するのみ。断崖の上に立ち、しばしことばもない。ロッキー山脈の分水嶺の一つ(3600m)に立ち、大自然の厳しさ、雄大さを満喫した。スーパー、キャフェテリアは庶民的なところである。順番を待つのに大の男がおとなしく並んでいる。ちょっと衣服が触れてもイクスキューズミーとくるから恐縮する。彼等は寛容である。反面、個人の権利を主張し、いかにげんな妥協はしない。個人とは別なものだという前提にたっているから、他人を気にする必要もない。

日本に帰ってきて、セカセカ人間が多すぎるなと感じた。車は歩行者そのけとばかり警笛をならし、信号が黄になれば他車に遅れじとばかり、1m、2mとじりじり前進する。たしかに私たちは忙しやぎる。あちらでは青でも歩行者があればピタリと止って「ゴーヘッド」と手まねで渡らせる。余裕がある。ユーモアも自然と口についてでてくる。日本の教育は緻密ではあるが、入試にあまり気をとられすぎているようだ。教育の成果はすぐには分らぬ。経済力は他国が恐れるほど成長した今日、アメリカの模倣はやめて、日本人としての教育を、国際的視野に立って考える必要がありそうだ。英語教育技術も他国に負けないものをもっている。上べだけのペラペラ英語でなく、本当に言うべきものをもっている実のある生徒を育てたい。

海

外

研

修

記

